

雨に浸る

—町の風物詩となるための建築—

21419023
指導教員

竹場 奈津子
宮晶子准教授

水害	雨	日足
持続性	風物詩	ふるまい

■制作の背景

高校1年生のとき、故郷である和歌山県新宮市熊野川町は紀伊半島豪雨による大水害で地域の建物の多くが浸水するほどの被害を受けた。

しかし、地域の災害を意識する大きなきっかけとなったこの水害時には、水に浸かったイスやテーブルを集めてみんなでご飯を食べたり、町の人達が協力して各家から重い家具や家電を運び出していたり、近頃子どもが減るにつれて見られなくなっていた、にぎわいが町の至るところで生まれているように感じた。

■災害がもたらすもの

自然災害は多くの人にとって、人間居住を襲う不確定なものとしてしか捉えられていない。しかし純粋な意味における自然災害というものは存在しない。災害はなんらかの人為の介在、人の営みがあるからこそ危機として立ち現れる。^{*1}

また「災害ユートピア」^{*2}という言葉があるように、災害が発生するとそれまでの秩序がいつの間にかなくなり、人々は自分達で救助隊や避難所を作っていく。災害という目の前の課題に向かうことで、人々の間に日常にはない結びつきが一時的に生まれる。

本研究では災害を、日常を壊す否定的なものとしてだけでなく、集団で居住を行うきっかけとなるものとして、さらには地域の持続性に深く関わるものとして捉え直したい。

■敷地概要

対象敷地は和歌山県新宮市熊野川町日足区とする。本流の熊野川と支流の赤木川の合流に位置するため、熊野川町の中でも特に浸水被害が起きやすい地域である。

熊野川町は国内最多雨地域であり、現在までに多くの台風や集中豪雨の被害に見舞われてきた。そのため水害対策として、低い場所に住んでいる人々は「上がり家」と呼ばれる避難用の家を持っていた。住民は自宅が浸かる前に「上がり家」に荷物を上げて避難し、水が引いた

らまた自宅に戻るといったように、ここでは水害はあるものとして捉え、暮らしていた。^{*3}

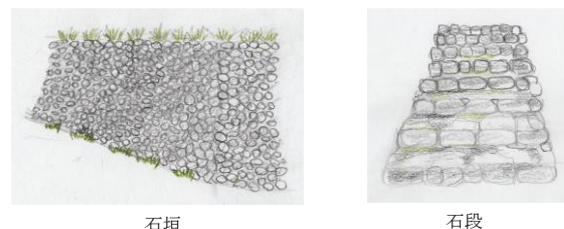


図1 熊野川町の位置

■敷地分析

1. 日足を構成する要素の抽出

敷地調査をして、日足を構成する要素となっているものの抽出を行った。



石垣

石段

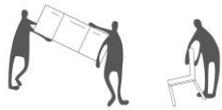
図2 日足を構成する要素

2. 水害特有のふるまいの採集

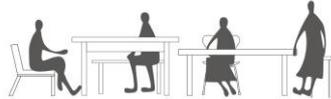
紀伊半島大水害における経験、日足区の住民へのヒアリング、『新宮市災害史誌』^{*4}より水害時にみられる特有のふるまいを採集した。

ヒアリングを行った住民は、泥水がある程度残っているときにその水で家の中を洗い流し、乾いても土が噴き出てこないようにしている。このように採集できたふるまいの中には、住民が何度も水害を経験してきたからこそ得た知恵や感覚を活かしたものが多くみられる。これらが紀伊半島大水害時に、この地域で避難や復旧が

スムーズに行われるに至った理由の1つだと考える。



各家をまわり、水に浸かった家具を運び出す



その家具を集めて、みんなでご飯を食べる場とする

図3 私が経験した、水害時特有のふるまい

また上記2つの分析の過程において、地図に記載されている道とは別に、住民が避難するときに利用する避難路や、より高い所へ素早く避難するために2階に出口が設けられている家が存在することが分かった。様々なものが風土と深く結びついていることが読み取れる。

■コンセプト

日足区で住民が今後何度も訪れるであろう水害と共に暮らしを続けることができるように、水害時に特有のふるまいが生まれるような場を提案する。またこれらが日常における活動のきっかけを生む場にもなることで、普段から住民にとって身近な存在となる。水害時に強くなる共同体の結びつきが次に来る水害にも作用し、町の持続性につながっていくことを期待する。

普段は遊び場が、水害時には泥水に浸かった家具を洗う場となる



図4 ふるまいを生む場のイメージ

■プログラム

1. 浸水エリア

浸水時における住民の避難路が交わる地点やその家の周辺には、水害時の避難や復旧作業、また自宅が浸水して家としての機能が失われている間の拠り所となる場などを設ける。普段は近くの小学校や保育所から子どもたちが気軽に立ち寄れる遊び場や、住民同士の関係をつくる場となる。

2. 浸水エリア外に位置する空家

浸水が起きにくい高い場所にある空家には、現在では小学校だけに担われている避難所としての機能を分散させる。水害時には自宅が浸水被害に遭わなかった人達が、この避難所で活動を行うこととする。また普段はゲストハウスとして貸し出し、全体として雨をいかした風景をつくる。

■提案例

浸水エリアに該当するこの空き地は、浸水時における避難路と重なる場所である。周辺には様々なものが無造作に置かれていたり、家の2階から避難するための出口と地面の間にはかなりの高さの違いがある。



図5 設計敷地写真

敷地を丁寧に読み取り、スタディを重ねることで、既存のものを活かしつつ、水害時において自然とふるまいが生まれるような形態を探っていく。

同時に、雨による水の流れや溜まりをその形態をつくる要素に組みこむことで、雨を可視化させ、日常における活動のきっかけをつくる。

こうした場が町に点在していくことで、子ども達の遊びの空間が町に伸びていく。さらに子ども達やゲストハウスの利用者と住民の交流の機会を生み、そして住民同士が交流する場にもなっていく。「浸り」を語源とする日足は雨の町として、雨による風景が展開され、繰り返される水害も風物詩として人々に受け継がれていく。

■主な参考文献

- *1) 伊藤毅、フェデリコ・スカローニ、松田法子編著『危機と都市』左右社 2017
- *2) レベッカ・ソルニット『災害ユートピア』亜紀書房 2010
- *3) 『熊野川町史 通史編』新宮市 2018
- *4) 上野山巳喜彦著『新宮市災害史誌』2016